

「2017年第10回中部 NGO-JICA 中部地域協議会」議事録

(以下、省略)

司会：皆さん、こんばんは。春一番吹きましたけれども、また寒の戻りということで大変寒い中、ありがとうございます。

皆さま、まだ全員そろっておられませんけれども、第10回の「中部 NGO-JICA 中部地域協議会」を始めたいと思います。本日、新しい方、特に JICA 中部では阪倉所長、木下次長を新しくお迎えして持たれる中部協議会であります。

それでは最初に出席者の自己紹介ということで、所属とお名前、もし簡単に初めての団体の方は少し活動内容などもお知らせいただければと思います。長くても一人1分以内でお願いいたします。それではお願いします。

多田：本日の共同司会を承りました、JICA 中部の多田と申します。いつも大変お世話になっております。今日はお寒い中、ありがとうございます。私の自己紹介はさることながら、一点皆さまにご報告申し上げたい事があります。

皆さま、お見知りおきかと存じますが、私の前任者でありました、小原基文さんが先週土曜日お亡くなりになりました。まだ若くて60歳だったのですが、急な話でお亡くなりになりました。明日、お通夜、明後日、告別式という段取りになっております。JICA 中部からは私が代表で参列させていただく予定にしております。皆さま方には誠に恐れ入りますが、ここで1分間の黙とうをお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。それではお願いいたします。黙とう。お直りください。ありがとうございました。では、次、移ります。

佐藤：こんばんは。JICA 中部市民参加協力課、市民参加協力調整員の佐藤と申します。このたびはまたこちらの方の地域協議会の方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

阪倉：JICA 中部の所長で、昨年12月に着任いたしました阪倉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私、この直後に4、5分時間を頂いておりますので、また後ほど話をさせていただきます。

木下：こんばんは。JICA 中部次長として、昨年10月に着任いたしました木下と申します。その前はタイに4年間おまして、その10年ぐらい前はパキスタンにいました。在外はパキスタンとタイという経験でございます。これからよろしくお願いいたします。

高坂：皆さま、こんばんは。JICA 中部市民参加協力課課長を務めております、高坂と申します。本日はよろしくお願いいたします。

岩瀬：皆さま、こんばんは。JICA 中部研修業務課課長を務めております岩瀬と申します。前回の協議会の際にお話をさせていただきましたが、NGOの皆さんにお世話になるような研修事業というものを前回、AJUさんの事例を紹介させていただきましたけれども、そういった研修事業も増えてきておりますので、また引き続きいろいろとお話をさせていただ

ければというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

梅村：皆さま、はじめまして、梅村尚美と申します。専門囑託ですが、今まで民間連携の方を担当しておりましたが、11月より草の根の方を担当することになりました。これから草の根をいろいろ勉強させていただきたいと思っておりますので、皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

多田：名簿には JICA 中部の職員の伊藤の名前が載っておりますが、本日あいにく都合がございまして、欠席とさせていただきます。失礼申し上げます。

門田：ここから NGO です。名古屋 NGO センター事務局の門田と申します。4年ぐらい協議会の担当をさせていただいております、佐藤さんや、もちろん小原さんにも昨年度まで大変お世話になっておりましたので、さっき小原さんの事をお聞きして、びっくりというかショックを受けておりました。よろしくお願いいたします。

八木：名古屋 NGO センター理事の八木です。所属団体は不戦へのネットワークです。よろしくお願いいたします。

伊藤：私、伊藤と申します。所属団体はニカラグアの会、あとは名古屋 NGO センターの理事をしております。よろしくお願いいたします。

竹内：同じく私も名古屋 NGO センターの理事をしています竹内ゆみ子と申します。所属団体は高山にあります、「まちづくりスポット」の代表理事をしています。これは前のソムニード、今、「ムラのミライ」といっていますが、それが5年前に大和リースと協働で設立した、地域の間支援団体です。プロジェクトとして3年間かけて設立をしました。それから NPO 法人、今は独立していますが、そういう「まちづくりスポット」に所属しております。

山田：こんばんは。NPO 法人日本ボリビア人協会の代表理事を務めています、よろしくお願いいたします。

石田：こんばんは。西アフリカのブキナファソで教育分野の活動を始めました、ル・スリール・ジャポンの石田と申します。よろしくお願いいたします。

北奥：名古屋 NGO センターで「なごや自由学校」の北奥と申します。よろしくお願いいたします。

西井：こんばんは。名古屋 NGO センター理事長の西井です。小原さん、先ほど訃報を頂きましたけれども、NGO-JICA 中部の方たちとの協働の推進には非常に尽力をさせていただいた方で感謝の気持ちとともにご冥福を祈りたいと思います。よろしくお願いいたします。

龍田：こんばんは。龍田と申します。名古屋 NGO センターでは今は常務理事をしています。アイキャンという団体がありますが、アイキャンの一応創設者で、今は監事をしています。それから AHI では今、理事をさせていただいております。

最近、やはり国内と海外をどう結び付けるかというものもあるのですが、最近、特に国内の少子化、高齢化という課題がものすごく身につまされるぐらい迫ってきています。私どものフィールドはフィリピンだったんですけども、例えば、フィリピンのまちづくりで

すけれども、ある小グループをエンパワーしながらそこを核に地域を作っていくという、同じようなプロセスかなと思っています。地域にいらっしゃる人がとても良い面を引き出して、お互いに協力しながら地域の力を上げていくということでは一緒かなと思います。最近結構日本の地域の人とお話しをすることが増えてきています。よろしくお願ひします。

中島：自己紹介をするのを忘れていましたが、中島といいます。名古屋 NGO センターの理事で、所属はアジア保健研修所です。よろしくお願ひします。それでは多田さんに、次、お願ひします。

多田：はい、ありがとうございます。それでは議事次第に従いまして、JICA 中部の阪倉所長より皆さまにごあいさつを申し上げたいと思います。

阪倉：それではあらためまして、JICA 中部の阪倉でございます。この後、座ったままでやらさせていただきます。今日は大変お寒い中、それから遠路お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

この中部 NGO と JICA 中部の協議会の第 10 回ということですが、始めた当時は、東京以外の地域でこうした協議会を立ち上げるというのは、先進的な試みだったと理解をしています。今回 10 回目ということで、年に大体 2 回ぐらいのペースでやっているということだと思ふんですけれども、私も 1 回目の協議の記録から一通り拝見をいたしまして、今日ここにお越しの NGO の方も第 1 回の当時から参加されておられる方、出席されておられる方も何名かいらっしゃると思います。まずこうした協議がここ名古屋で継続できていること、それからずっと参加をいただいているということに、これはもう両者の努力だと思ふすけれども敬意を表したいと思ふます。

私自身は先ほど申し上げましたとおり、昨年 12 月に東京の JICA 本部から JICA 中部に着任をしました。直前は本部の方で東南アジア大洋州部という所で仕事をしておりました。特にベトナムとかインドネシアとかミャンマーとか、ああいった国々で今、日本政府が進めています質の高いインフラ整備の支援というものの旗振りをやっておりました。この質の高いインフラ整備というのも、ひと昔前で言いますと、日本のそれなりの技術を持った大手の企業さんの特定企業支援に当たるのではないかということで、昔であれば普通 ODA ではやらなかった事です。

ただ、これもかなり政府の考え方のパラダイムシフトみたいなのところがあつてですね、日本の得意とする技術、あるいは製品そのものをどんどん積極的に途上国に紹介をしていこうということです。それが途上国の例えば、貧困削減とかあるいは開発にプラスになる、それから途上国の成長というものを支えていくということができれば、どんどんやっっていこうということで考え方の転換がありました。

私自身も、例えば、ベトナムとかフィリピンなんかの鉄道事業を担当していますと、こういうプロジェクトの、例えば、あまり他国の事を言うのも何ですけれども、例えば、中国がフィリピンとかベトナムで手掛けたようなプロジェクトの顛末、あるいは質といった

ようなものを見ると、ぜひ日本の良いものを紹介したいなという気持ちにはなります。それが途上国の開発にプラスになって、あるいはできあがったものを見て、途上国の人が喜んでくれるというようなことがあれば、その方向性は間違っていないだろうと思います。

言いたかったのは、私たちがやっている仕事の最終的な目的というかゴールというのが、単純にその国のためになるかどうか、あるいはその国の人が喜んでくれるかどうかにかかっているのかなと思います。もちろん、われわれ JICA という意味で言えば、組織としての制約とか、あるいは条件みたいなものがありますので、その制約の中でできるかぎり柔軟に考えて、実際に行動に移していくということが求められているだろうと思います。

そんな仕事をしていまして、12月に名古屋に着任をしまして、今現在まだ JICA 中部のいろんな活動を勉強しているところではあります。ただ、今日お集りの NGO の皆さま方との連携というのは、その重要な柱の一つということ間違いなくと思います。

ここ名古屋で、私自身初めての仕事として、例えば、開発教育とか国際理解教育の分野の、この前も実は研修がありまして、その研修会に出ました。実はこの分野でも非常に皆さま方にお世話になっているということを勉強不足で知らなかったものですから、さっき、草の根の話なんかも出ましたけれども、今、いろんな所で JICA と NGO との間の連携というのが行われているということも、まさに勉強している途上であります。もちろん、NGO と JICA の間でいろんな違いというか相違点はあると思いますけれども、何のために連携するかと言えば、結局は途上国支援のために連携するということだと思いますので、双方の機能とか役割の良いところを活用し合って協力していければというふうに思います。この協議会、双方の情報共有、あるいは意見交換の貴重な場とっておいておりますので、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

多田：はい、どうもありがとうございました。ちなみに、阪倉所長は名古屋出身でございます。

阪倉：生まれも育ちも名古屋ですので、土地勘はあります。

多田：この間も飲み会に連れていってもらいました。失礼しました。ありがとうございました。

それでは次の議題に移りたいと思います。遅れて来られた方がいらっしゃるのので、自己紹介をいただきたいと思います。

ツツイ：遅れまして申し訳ありません。ツツイヒロハルと申します。名古屋 NGO センターのインターバル研修生であります。よろしくお願いいたします。

多田：ありがとうございます。それでは次の議題の移りたいと存じます。報告事項、約 35 分報告事項が 6 項目ほどございます。それぞれお願いしたいと思います。最初の報告事項が 2016 年度の「第 1 回草の根技術協力の採択内定状況」と、それから「第 2 回の応募状況」パートナー型、支援型、地域提案型、それぞれにつきまして、JICA 中部の高坂課長から簡単にご報告を申し上げます。

高坂：それでは、草の根技術協力事業の応募状況についてご報告させていただきます。はじめに、すでにご存じの方もいらっしゃると思うんですけども、草の根技術協力の類型について簡単にご説明申し上げます。

草の根技術協力には3類型ございまして、まず「パートナー型」と呼ばれるもの、こちらは途上国での国際協力活動の実績が2年以上おありになる団体で、上限1億円を設定しております。続いて「支援型」ですけども、こちらは海外での活動実績は特に問われないもので、活動経験が2年を有していればよいというものでございます。こちらは上限1,000万円でございます。

続いて、3つ目の「地域提案型」です。こちらは地方自治体からの提案の制度でございます。ただ自治体が提案してNGOさんであったり、大学であったりといったところが実施している例もございます。こちらは2012年度から地域活性化特別枠として、上限6,000万円を実施している例もございます。

以上が3種類の簡単なお説明でございます。今年のお応募状況ですけども、まず2016年度第1回目の「パートナー型」は2016年の7月下旬に締め切っております。日本全国で28件の応募がございまして8件が採択されております。JICA中部所管の愛知、岐阜、三重、静岡での応募は3件でございます。そのうち1件が採択内定しております。この「パートナー型」の第2回目の公募は昨年の12月中旬に締め切りまして、全国で応募は30件ございました。JICA中部での応募は3件で、現在、審査中でございます。

続きまして、「支援型」のお応募状況についてご説明申し上げます。2016年度第1回目の応募は6月に締め切りまして、全国で34件の応募があり、12件が採択されております。JICA中部所管地域での応募は5件で、残念ながら採択案件はございませんでした。

支援型の第2回目は11月に締め切りまして、全国で32件の応募がございました。JICA中部での応募は2件で、現在審査中でございます。結果は2月下旬に発表予定とのことです。

最後に地域活性化特別枠でございますけれども、2016年度補正予算での公募は12月に締め切りとなり、現在審査中でございます。JICA中部での応募はございませんでした。以上が、今年度の草の根技術協力事業のお応募状況ですけども、今後の募集スケジュールについても簡単にご紹介させていただきます。

まず「パートナー型」は、次回は4月下旬に募集を開始しまして、6月下旬に締め切り、9月に審査結果を通知予定です。「支援型」につきましては4月上旬に募集を開始しまして、6月に締め切り、9月に審査結果を通知する予定です。

地域活性化特別枠につきましては、3月下旬から4月上旬の間に募集を開始予定です。5月に締め切り、8月に審査結果を通知する予定です。以上簡単ですが、草の根技術協力事業のお応募状況ならびに、今後の募集スケジュールについてご説明申し上げます。

多田：ありがとうございます。何かご質問、コメント等はございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは次のトピックに移りたいと思います。

「草の根技術協力実施上の留意点」ということで、JICA 中部の佐藤よりご説明報告申し上げます。

佐藤：私の方からは、資料 1、それから別添 1 を配布させていただきました。まず、「草の技術協力事業における安全対策について」ということをご紹介します。昨今、やはりテロとかいろんな事件に日本人が巻き込まれるということがあります。草の根技術協力の支援型、パートナー型、地域活性特別枠もそうですけれども、やはり地域によっては治安状況が悪く実施ができないというような国が出てきています。外務省の渡航情報を見ていただくとお分かりだと思いますが、JICA の草の根技術協力におきましても、現地で活躍されていらっしゃる方、それから渡航される方にご注意をしていただきたいということで、今年度はかなり安全対策について会議も開催しておりました。ですので、今度、草の根技術協力を活用していただくに当たり、ご周知いただけるよう、今日ご紹介させていただきます。

一つ目は、「テロ対策の対応の徹底周知」ということで、総務部の安全管理室が出したテロ対策について書かれているものを別添させていただきました。もちろん、最近はどこか特定ができないくらい空港でもテロがありますので、皆さまご存じだとは思いますが、渡航の時は気を付けなければいけないということを留意していただければと思います。

もう一つは、草の根技術協力事業の業務委託契約書の中に、安全対策に関して付け加えられた事項がございます。それは、業務従事者の海外旅行保険付きの義務付けの徹底ということになっています。皆さまも海外に行かれる時に保険に入っているとは思いますが、事業を安全に行うためにも保険には必ず入っていただくようお願いをしています。

以前、JICA にも保険のバックがあったのですが、今回新しくなった「無事カエルバック」というのもございますので、草の根技術協力を実施される団体さんは活用していただけるようお願いします。もちろん個人でお入りになっていただく保険でも構いません。

それから緊急輸送サービスが付帯されたものも良いと思いますし、あと、在日本大使館への在留届も出していただくようお願いをしています。

あと、海外旅行登録のシステムで、「たびレジ」というのをお聞きになったことがございますでしょうか。最近よくインターネットでもご紹介していると思いますが「たびレジ」での登録の義務付けを行っています。

草の根技術協力に限らず、海外に行く時は「たびレジ」にぜひ登録をしていただくことをお勧めします。

それから JICA の中で安全対策研修というものを設けました。それは Web 式と座学があるのですが、プロジェクトマネージャーには必ず座学に出ていただいて、東京で定期的に行っている安全対策研修を受けていただくことになっています。それが義務付けられたということが変更になりましたので、こちらもご利用いただければと思います。安全対策については簡単ですが、お話しさせていただきました。

次に「資料 2」の方を見ていただきますでしょうか。

採択内定についてのホームページにいろいろと書かれています。採択内定されてから事業を実施するに当たり、相手国の政府から了承取付を取らないと、その事業は JICA と契約締結することができません。実際この事業を調整していくに当たり、この了承取付というのが、かなり時間がかかります。ですので、ご提案をしていただいてから、早くても3か月かかり、長いもので1年以上、了承取付が取れなくて実際に事業ができなかったという団体さんもございます。

準備として、カウンターパートになる相手のグループ、NGO、地方行政、学校、病院など、相手の国の機関がどの省庁に属しているのかというのを、よくお聞きになるということも、準備の一つだと思います。

又、自分の団体、日本の団体も NGO 登録をしないと活動ができないという国もあります。それは国によって違うので、一概に全部がそうしなければいけないというわけではありません。NGO 登録がないと応募ができない対象国もありますし、採択内定になってから NGO 登録をしないとダメだという国もあります。ですので、カウンターパートになるグループ、一緒に相手の人たちと働く方々に実際活動を継続するにはどうしたらいいのかというの、準備の段階でいろいろとお聞きしていただくといいかと思います。

4 ページの 1 番の URL の貼り付けなのですが、ホームページをクリックしていただくと、国別にどういうものが必要なのかというのが詳細に出ています。ですので、将来的に草の根技術協力に応募をお考えの方は、ここから何が必要なのかというのをご確認いただきながら準備を進めていただくといいかと思います。

山田：すみません。登録制度と書かれている図がありますね。4 ページになっている所です。(2) の中で登録制度を書いています。これは現地で登録するか、しないかの意味でしょうか。

佐藤：そうですね、国によって違います。その国で NGO 担当省庁に提出をして、自分たちの活動をその国に知ってもらう、登録しなければならない国もあります。例えば、私は東ティモールに長くいたんですけど、東ティモールも NGO 登録を現地でするように言われています。それはここからはなかなか情報というのを得られなくて、東ティモールの NGO の方々にそれをお聞きして書類を出して提出したということがあります。他の国にも NGO 登録をしなければならないという国もあります。その NGO 担当省庁を構えていない国もあるので、山田さんのご支援されている国がどうなのかというのを調べいただければという意味です。

山田：ありがとうございます。

多田：その他、何かご質問等ございませんでしょうか。もしあればまた後ほどでも結構です。かなり硬派な話になってしまいました。ありがとうございます。

それでは次の話題は、2016 年度に開催いたしました、NGO 活動支援事業の中の「事業マネジメント研修」につきまして、実際に参加されました中島さんの方から参加のご報告、参加者の声ということでお願いをいたしたいと思います。よろしくお願ひします。

中島：私が参加というよりは職員2名、担当者が参加しましたので、そのうちの一人の職員がこのペーパーの原案を書いてくれました。それをもってご紹介したいと思います。

この事業マネジメント研修なんですけれども、1月10日と11日にJICA中部さんの方で開催されました。AHIは2名の職員が参加しました。資料の3をご覧ください。現在、JICAのその事業の実施団体ではないので、対象ではないとは思われるんですけれども、今回、2つの目的でその会の職員が参加しました。

一番目に、AHIでは、元研修生との協働事業というものを実施しております、その中間評価、最終評価を見据えつつ、プロセスの見直しや改善ポイントを考える視点、手法を得るということです。もう一つは事業マネジメント研修を通して、AHIとして何が不足、何に配慮せねばならないか、また従来のAHIの事業の持ち方から見て、どこを大切にすべきか、してきたのか、そういうことを再度考える機会にしたいということで参加しました。

下の所に、AHIの元研修生との協働事業というものが、どういう役割、位置づけ、チェックポイントなどが書いてございます。2000年ぐらいから特に、今現在、そうですね、700名近くの国際研修というものを受けた研修生がアジア各地にありまして、その研修生のイニシアティブと発意を尊重して、それに寄り添ってAHIが技術的にも、もちろん学び合うという視点から、こちらも出来る事は技術的にも財政的にも協力するというで行ってまいりました。

位置づけの所に書いてありますけれども、協働事業の目的は、研修生のフォローアップです。それから先駆的な事、誰も手を付けてないことの試みを後押しする。それからその経験を記録し、事例化を促し広く共有するということです。いろんな形のワークショップなどの方法を通して、研修の中で先行事例として共有し、そこから学び合うという形を取っています。その下の所に書いてありますけれども、AHIとの協働姿勢を持っていることも条件です。それから共に担う、進める環境です。中身については、人々のエンパワーメントと健康につながる人づくり、人の広がりがあるというようなことをポイントとしております。

次のページに行きまして、実際に参加した清水職員の感想です。AHIの協働事業で、現在進行しているものが、スリランカとそれからフィリピン2カ所、パキスタン、ネパールの全部で5事業があります。その5事業全部に関して、この事業マネジメント研修を活用して見直すということのために参加しております。パキスタンの事業では地元NGOワーカーの参加型リーダーシップ育成研修というもので、アジア保健研修所が日本で実施している参加型研修というものをパキスタンの現地で推し進めております。パキスタン北部のラホール市において、ローカルNGOスタッフを対象にした参加型研修を進めています。元研修生の団体との協働で企画実施、評価に関わるということで、毎年4月ぐらいに10日間、15～20名のローカルNGO、小さいNGOが多いのですが、のスタッフが参加して実施されております。2014年から3回続けておりまして、今年で4回目になります。その中で、特にそこにも書いてございますように、PDMの指標、WBS作成、リスクマネジメントの再

検討というところが甘かったというような反省がありまして、そこを強化していこうということですので。それから報告書のフォーマットを PDM に沿った形に変えていこうということですので。それから中間評価の準備を早めに進めていこうというような気付きがありました。ということが、5つのうちの1事業ですけれども、他の4事業に関してもこのように事業マネジメント研修が非常に役に立っているということが、これを活用して見直していきたいというふうに、担当者が言っております。

最後の所、3ページ目です。ここの研修の中で扱われた事例だけしか見ていないので分からないんですけれども、イの所です。「そもそも」と書いてあります、その所ですが、特に AHI の場合はエンパワーメント、それから持続性の達成ということを大事に考えているのですが、その時の研修で扱われた事例の中では、それがあまり表せていなかったということもありまして、「事業の目的、内容自体も住民自身が決めていくような、そういう現地の住民のカウンターパートが進めているという事例は、草根の事業の中であるでしょうか」という質問です。それからもう一つは「受諾した団体が必ずしも駐在しなくても、そのプロジェクトマネージャーを現地のカウンターパート団体が行うような、そしてそれを日本の NGO が側面支援していくような、そういうやり方も草の根事業の中で考えられないか」と言い換えると「より現地のカウンターパートの主体性が強いような事業は草の根事業に馴染まないでしょうか」というような質問です。というような、2点の問題提起というか質問を出しています。

ということで、大変マネジメント研修が私たちの事業にとって見直しの重要な機会になっているということでご報告しました。以上です。

多田：はい、どうもありがとうございました。ご質問、コメント等、今のレポートについてございますでしょうか。

中島：ソムニードさんはそのような草の根事業として、現地の住民グループが主体となるような事業とかされているのでしょうか。

竹内：インドでの事業で、もう忘れてしまったのですが、現地の方が主体的に提案することとは、最初にこちらが3年間の経緯とはかなり違ってきます。主体的に現場で問題を見つけて提案してくるということです。なので、その都度、その都度、変わってきたことの理由を書くのが大変なので、1カ月に1回、事業日記のようなものを JICA さんに提案し、四半期に1回提出する前に毎月、成り行きを報告しておきました。ですから、その変更が割と認められやすかったということです。3カ月、4カ月でこういうふうに変ったよということ、JICA さんの方も最初の計画と違うのではないかというふうに言わざるを得ないのです。それを回避するために出すようにとは言われてないのですが、毎月、現場の状況を提案し、変化を共有するということをし、それで主体的な活動を見出すということをやっています。

中島：そういう担当された JICA の職員の方も柔軟性があったというか、良く対応していただいているのでしょうか。

門田：それは JICA の緒方貞子さんですね。長官賞を頂きましたから、かなり良かったというふうの評価をしていただと思っています。

中島：じゃあそういう事例があるということですね。ありがとうございました。

多田：その他、コメント、ご意見等はよろしいですか。ひとまずここでひと区切りさせていただきまして、次の話題に移りたいと思います。

次は、「NGO と提案型プログラムの実施計画について」ということで、名古屋 NGO センターの門田さんのご報告をいただきたいと思います。

門田：はい、座ったままで失礼いたします。「NGO 等提案型プログラムの実施計画について」本日、資料は無いのですが、口頭で失礼いたします。

今年度より、NGO 等提案型研修、昨年度までは「地域提案型研修」という名前の研修で、今年度より名称と契約の形態が制度変更されました。それで名古屋 NGO センターとして、研修の提案をさせていただいて、現在採択は決まっているという状況で、ただまだ契約はしておりません。あくまでもこちらの計画段階ということのご報告ということになります。

今年度採択はされたのですが、実施に関しては、来年度 17 年度の 6 月以降を今のところ予定しております。この研修、は 4 点の目標を持っております。

先ほど、中島さんから、NGO の自主性をもったプロジェクトづくりというお話があったのですが、この研修では NGO の理念や存在意義について参加者の皆さんが理解し、海外だけではなく国内のコミュニティや農村開発の現状についても関心を持つことで自らの活動のビジョンを明確にすることができるという目標です。

2 点目は、ビジョンに基づいた対象地域のニーズや、課題に合致した案件形成ができるようになるということです。3 点目が、参加団体が目標に合致したファンドレイジングの情報や活用方法を熟慮し、計画また実施できるようになるということです。4 点目は団体同士のネットワークが形成されるという目標を立てています

この研修の制度では 3 年間の契約が可能ということで、提案としては 2 年半ほどの計画を予定しています。その間、参加団体の皆さんが、先ほど申し上げたような目標に合致したファンドレイジングの方法を実践をしていただいて、それに専門家からの個別アドバイスも受けながら、実際に研修の中で実践します。お互いに実践、意見交換し合って、アクションまでを実際に行うというような研修内容を予定しております。また本日、来ていただいている方々にもご参加をいただきたいと思っております。引き続きよろしく願いいたします。

多田：はい、どうもありがとうございました。今、ご報告いただいた点についてコメント、ご質問等はございますか。よろしいでしょうか。ありがとうございました。それでは次の話題に移りたいと思います。

次は、2016 年度第 3 回 NGO-JICA 全国協議会、全国レベルの挙議会、こちらに参加いただきました、名古屋 NGO センターの龍田さんから、協議会の内容についてご報告をいただきたいと思います。龍田さん、よろしく申し上げます。

龍田：では、龍田の方からご報告いたします。私、今年度は JICA-NGO 協議会の NGO 側のコーディネーターの一人です。第 3 回の会議は、12 月 15 日、東京の本部の方で行いました。それについてご報告いたします。この日は、協議事項については、地方創生、地域活性化と、それからもう一つは SDGs の取り組みについてと、この 2 つが協議事項でありました。他に報告事項としては、先ほど来、話題になっております安全管理、それから ODA の本体事業における NGO-JICA の連携、それから開発教育推進のためのタスクフォースについて、それから SATREPS における NGO-JICA の連携について、そして NGO 等活動支援事業について、さらに世界の人々のための JICA 基金について、最後、活動の質に向けた NGO の取り組みについてという、こういう 7 項目について報告事項がありました。ここでは、特に中部の NGO に関係するようなどころをかいつまんでご報告させていただきます。

まず協議事項の 1 の「地方創生・地域活性化」についてです。これについては、一応、NGO 側としては、地域活性化枠ですが、これは基本的には地方自治体ということで静岡県の方から出されている案件です。実際には、シャンティ、SVA、静岡県の天竜厚生会という地域の団体と協働で、静岡県と相談しながら出している案件です。これは全般的にはカンボジアの幼児教育の改善を天竜厚生会の方が向こうに行って教え、また本邦研修という形で受け入れて教えるというような形でした。この中でももちろん現地の質も向上していくというものもあり、なおかつ、この天竜厚生会の保育士の方々はだんだん国際協力とかそういったもので目覚めていくというような、そういうプログラムということでした。

2 つ目、JOCA さんの地域活性化の取り組みということでした。これは実際には金沢の佛子園という所がありまして、社会福祉法人ですが、そこの成果の横展ということでした。佛子園が今までやってきた多様なステイクホルダーが混ざっていろいろ助け合いながら全体の福祉を盛り上げていくというような形のものがああります。佛子園の理事長さんが JOCV の会長さんという関係もあって、この佛子園の取り組みを全国 3 カ所程度に横展していくような形で JOCA が提案しているというような事業です。

それから、報告事項の安全管理についてなんですけれども、これは先ほどから JICA 取り組みについては、ご報告がありましたが、NGO の方でも自主的に安全管理のイニシアティブということで取り組みを、ガイドライン等を設けています。NGO はどうしても必要とされる人の所に行きたいというニーズがありますので、あまり行けなくなるのは困るが、しかし自分たちの身は守らなければいけないので、自主的なイニシアティブを作って対応していますという報告でした。

それから、次は開発教育推進のためのタスクフォースです。これはアンケート結果のご報告ということで、そのダイジェスト版では分かりませんが、かなり広い範囲で実施されました。NGO 側は大体 107 あたりから回答があったということです。JICA 側は国内拠点を中心に関係者で 55 人から回収しています。NGO 側の要望は過去のいろんな成果、提案、ここで作ったハンドブックも含めて、以前行われた開発教育小委員会などの成果をちゃんと踏まえて土台にして話し合いたいということでした。それから地域と都市部の

ニーズは違います。名古屋も含めて都市部ですけれども、地域に合わせたアクションプランを作ってほしいというのが NGO 側の要望でした。JICA 側の要望としては、他県のグッドプラクティスを共有してほしいということと、うちの県には組める NGO があるのかという、そういう情報も共有してほしいという発言もありました。

次は、NGO 等活動支援事業については、JICA が中心になってやる JICA 企画プログラムの報告と、先ほど門田からあった、NGO 等提案型プログラムについて採択案件について報告があったということです。

それから6番の世界の人々のための JICA 基金については、ここは採択案件というよりも、システム変更は少しありそうだということでした。今までは期の真ん中ぐらいで募集がありましたので、結局1年間の契約と言いながら、年度末に一回切らないといけなくて、2回決算操作が入るといような話でした。これを年度に合わせて始められるように変えていきますという報告がありました。

以上が大体第3回 NGO-JICA 協議会の報告です。第4回協議会は3月16日の午後、東京であります。また JICA 中部でも、テレビ会議で参加可能だと思いますので、また地域の NGO の皆さま、JICA の皆さま、ご参加のほどよろしくお願ひします。以上です。

多田：どうもありがとうございました。ただ今の龍田さんのレポートにつきまして、ご質問、コメント等ございますでしょうか。どうぞ。

木下：3番の「開発教育推進のためのタスクフォースについて」というところで、この後、どういうふうに進めていって、どういうところを目指していくのか説明していただければと思います。

龍田：今回はアンケートの結果ということで、これを受けて、今、タスクを重ねていくということです。

多田：次長、よろしいですか。ありがとうございます。その他、ございますか。

八木：質問があります。

多田：どうぞ。

八木：SDGs の取り組みについて2の1の JICA の SDGs に向けて取組方針ということですが、SDGs は内閣府が国内の中で実施していくということで5月に立ち上げられた内閣府の首相が責任者になっている部門があります。国内で取り組みを進めるために地域の中に落とししていくということがあると思うのですが、JICA の例えば、地方のセンターが地方自治体とか地域の NPO とかに呼び掛けをして、地域で実際に SDGs の実施指針を実際に進めていくハブのようなファシリテートするようなそういう役割というのは外務省の方から期待されているというようなことはないのでしょうか。

龍田：それは私より JICA の方が方がよろしいかなと思います。

八木：この中には出てないですね。

龍田：SDGs に関連づけた NGO-JICA の連携について、この資料の中で取組の事例や SDGs 達成に向けた NGO-JICA の連携の可能性に関連して言及があったということです。どう

いうふうにこれから JICA の人たちがされようとしているのか情報がまだありません。一応、その時出されたポジションペーパーを一つ出したのと、どちらかという、JICA の取り組みとしては、「日本からの支援から途上国と学びあう支援へ」というのが一つと、それからあと、NGO と JICA との連携に向けてということで、国内外の現場の近さということもあり、NGO との協力は必要ということと、それから開発教育の所で特に連携をしていきますということと言及されています。

それから「SDGs を踏まえた草の根協力への連携等」と書いてあるので、草の根についても SDGs を絡めて少し考えていきたいと思います。あと、SDGs に関するセミナーもやりたいということで、NGO との連携が可能であろうということが言われていて、あと、取組事例としては地域提案型のホーチミンと大阪の事例を一つ出しているということと、それから民間技術の活用ということで、民間技術普及推進事業と、無償資金協力、自治体連携無償等で一つ取り組んでいるということです。一応 JICA 側の資料についてはホームページに載っていますので、協議会の所から探していただければ出ていると思います。以上です。

八木：ありがとうございました。

多田：どうもありがとうございました。よろしいですか。それでは、次の話題に移りたいと思います。報告事項の一番最後になりますが、国際協力カレッジ 2016 の実施成果につきまして、12 月に開催されたものです。こちらについて門田さんの方から再びお願いしたいと思います。

門田：お手元のカラーチラシをご覧ください資料とさせていただきます。実施成果については口頭で失礼いたします。

こちらの国際協力カレッジに関しては、チラシを開けていただきますと、一番上に趣旨が書いてございますけれども、JICA 中部と名古屋 NGO センターとの協働により、2006 年にスタートし、今年で 11 回目になります。この中部地域に住んでいらっしゃる、主に若い方々をターゲットとして企画しているプログラムになります。国際的な課題に関心を持つ人々が現場の声に触れ、考え動き始める学びときっかけの場を目的にしています。

基本的なプログラムの内容は同じ形で例年実施していますが、午前中が学びの時間、午後が行動の時間ということで、学ぶ座学だけではなくて、実際にこの地域の NGO ですか、例えば、名古屋国際センターや地域の国際協力、もちろん JICA の青年海外協力隊相談コーナーの方も設置をいただいていますけれども、地域の国際協力のさまざまなセクターの方々にお越しいただいて、実際に市民とつながる場ということで企画をしております。

今年度は、12 月 3 日に開催いたしました。定員は 70 名ということでやっておりますけれども、今年度は定員を上回る 78 名の方にご参加をいただいております。アンケートの結果について成果としてご報告をしたいと思います。参加者 78 名中 55%の方が当時に実際にボランティアまたはインターンとして関わりたいと思う団体が見つかったというふうに回答をいただいております。また個別プログラムの企画内容についても、午前中のシンポジ

ウムは 91%の方が「大変良かった」と回答いただいております、他のプログラムに関しても 80%以上の方が「良かった・大変良かった」と回答をいただいております。またアンケートの方には「来年も参加したい」ですとか、「できれば年に2、3回開催してほしい」、「知らなかった団体を知れて良かった」「一度にたくさんのお話を聞けてワクワクした」「中部地域で活動する団体が一挙に集まるイベントがとても良かった」という声が多数寄せられております。

また出展団体の方からのアンケートの結果として、出展団体 16 団体のうち「実際にボランティアを希望する人がブースに来た」とお答えいただいた団体が 12 団体ございました。団体からも、「今後も継続してほしい」という声ですとか、「イベントの翌日から早速ボランティアに来てくださっています」というようなアンケートの結果を頂いております。非常に即効性の高いイベントであるということを確認いたしております。「もっと話を長く聞きたかった」というような声も一部頂いておりますので、時間配分と工夫の余地はあるかなと思いますけれども、このイベントに関しての期待が大変高いということのほうがえる結果となりました。今年度 11 回目ということで、名古屋 NGO センターが JICA 中部との協働として受託していますが、イベント自体への期待や、関心は非常に高い、このような実際に動き出す企画というのはこの地域に他にないものというふうに思いますので、また今後も実施を期待されているところではないかと思っております。以上、国際協力カレッジについてのご報告です。

多田：ありがとうございます。今、ご報告いただいた国際協力カレッジについて何か補足、コメント、ご意見等はございますか。今日いらっしゃる方々の中でいくつか出ていただいた NGO さんもいらっしゃるかと承知しておりますが、特に何かございませんでしょうか。遠慮なさらずにぜひ、お願いします。よろしいですか。

石田：この 2015 年と 2016 年、2 年連続でやらせていただきました。われわれまだ設立間もないということもあって、なかなか慣れてないということでありました。他の団体同士の意見交流の場にもなりましたし、愛知県というか東海地域のボランティアに興味のある方々の意見も聞くことができましたので、有意義なイベントなのかなと私は思いました。

多田：その他の NGO の方々、いかがですか。何かコメント、ご感想ありましたら、お願いします。いかがでしょう。

竹内：2 年前までソムニード、現在のムラのミライに関わっていて、国際協力カレッジに参加したことがあります。こういうふうに一堂に会して、しかもステップ 1 というか入門的な内容で大学生、若い人を中心に国際協力に触れることはすごく良い催しものだというふうに思っています。国際協力というと、どうしても海外に行かないと出会わないと思っている学生さんたちも多くて、海外に行かなくてもこれだけ一堂に会してそれぞれの人のお話が直接聞けるという、これは実際現場に出てこれに出ている人にとっては物足りないかもしれないですが、あまりにも専門性が高過ぎて一般とのギャップが広がる傾向を食い止めるためにはすごく良い活動ではないかなというふうに、2 年前に参加した時に思いま

した。団体としての若手の育成、スタッフの育成にもつながると思います。自分の内々での話を外に全く人に知らない人に話す方法論みたいなこともここで学ぶことができ、私は高く評価しております。

多田：ありがとうございます。その他、ございますでしょうか。こんなところでよろしいでしょうか。ありがとうございました。以上で当初予定しておりました6項目の報告事項を終わりにさせていただきたいと思います。

おかげさまでもちまして、ほとんどオンタイムで10分程度の遅れでこなすことができました。今日なかなか部屋が温まらないで申し訳ございません。底冷えがするというのはこういうことを言うのでしょうか。下の方から冷えてまいっておりますので、5分ほど休憩を取らせていただいて、その後、また次のセッションを始めたいと思います。今46分なので、52分ぐらいからまた始めたいと思います。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

西井：議題設定の仕方を少し工夫してみるとか、例えば、NGO-JICA 協議会では全国の割と広めの議題設定がありますけれども、どうしても地域での開催ということになりますと、その地域限定ということになるんですけれども、何かうまく議題を設定して、広く NGO 関係者が関心を持つようなテーマを設定できないかという感じがしています。もちろんそれはコーディネーターの方たちにご負担が掛かるというようなことはよく承知はしていますが、何か工夫することによって参加者を拡大していくことができないかなというふうに思います。それをまたすぐにできるかどうかということについても、議論が必要ではあるのですけれども、それが一つ現在の中部協議会の陥っている状態をどういうふうに活性化していくのかということに対する、一つの方向かなというふうには考えています。

それから回数に関して言いますと、年2回ということですが、1回は私の感触ではありますけれども、1回はしっかり議論をする場を作ってもいいのかなというふうに思います。それぞれ JICA 中部さん、それから NGO 側の取り組んでいる課題なり問題意識などを情報交換も含めてしっかり共有をしていくということがあってもいいのかなというふうに思います。現在2回ですが、2回目といいますか、もう一回に関しては、少し砕けた感じといいますか、あまり肩肘張らずに懇談する場にしてもいいのかなというふうに思っています。その場合でも、全くテーマ無しでやるということには行きませんから、少しテーマが必要なかもしれませんけれども、何か面と向かってというような形じゃなくて、また別の形もあり得るのかなというふうに思っております。ですから回数に関しては、何て言いますか、現在の形というか、この回数は維持して行ってほしいなというふうに、私は感じています。せっかく5年間続けてきましたし、それからその前の10年以上の年月の JICA 中部さんと NGO との連携の歴史といいますか、それの上に築き上げてきた協議会であろうと思いますので、回数については現在のままでいいのではないかなという感じがします。すみません、長くなりました。

司会：ありがとうございます。他の方は回数に関していかがでしょうか。門田さんは何かありますか。

門田：今、西井の方からは原則2回ということで意見がありましたが、私どもの方でも内部で回数のことをどうしましょうということで話をしてまいりました。また、コーディネーター会議でも、皆さま大変お忙しいということもあり、細かな話ですが、日程調整が難しく、コーディネーターのコーディネートにも労力が掛かり、厳しいなというところではあります。ただ先ほど、西井の方からも意見がありましたけれども、議題設定の持ち方を工夫し、もっと広くご意見を頂きやすいような形の議論の場にしていくというような方向性も工夫としてあるかと思っておりますので、そういった事をしていながら続けていければいいのかなと思います。

中島：他の方はいかがでしょうか。これは主に NGO 側の意見を出していけばよろしいでしょうか。JICA さん側の方はご意見もしございましたら、ざっくばらんに言っていただければと思います。

岩瀬：私はまだ今回2回目の出席なので、見当違いのことかもしれませんが、今回参加するに当たって、『協働のハンドブック』というのをインターネットでこれを読んでおいてくださいということで読んで、今回、楽しみにしていたのです。たぶん、JICAさんであろうが、NGO、国際化担当課のコンサルだとか一般企業であろうが、ある程度は海外での活動をする上において、現地の生活の向上といった似たような目的はあると思います。なので、なるべく、私、いろんな団体との協働ってできるような機会があると本当にうれしいのです。そうなる時に協働のハンドブックにJICAさん側からの意見、NGO側からの意見ということで、分かり合えていないような部分がたくさん書かれていたので、そういう分かり合えていないようなことをテーマにして、けんかになってもおかしいんですけども、それは違うだろうというぐらいやり合うと分かり合えるようなことがあると協働が進むのではないかなと、実は今日は楽しみにしていました。そうしたことが実はテーマになっていてもいいのかなと思いました。その上で2回という回数設定になるのならば、それで構わないですし、面白いから年4回だ、年5回だとなっても構わないのではないかなと思います。回数が先に決まるものでもないの、テーマに合わせて、今、せつかく2回維持されているのならばその上でということもあっていいのかなと思いました。ちょっとまとまらないですが、すみません。

中島：ありがとうございます。2回以上というご意見が出ました。また協働の在り方というようなこともテーマになるのではないかとということですね。いかがでしょうか。

龍田：あまりNGOからばかり発言するというのは好ましくありませんが、この会議は公式の場という色彩が強く、ざっくばらんというのはなかなか難しいです。東京で全NGOとJICA全体で行う協議会では、懇親会があって、さらに懇親会の時に結構面白い話が出て、次のアイデアを何かそこで探っているようなところもあります。オフレコの部分が、この会議では無いものですから、コーディネーターだけで話していても、なかなかそこは進まないところもあります。前回、私どもの政策提言委員会で話していた時は、さっき少し形を変えて2回目にざっくばらんな形の講義会を行ってはと言っていました。例えば、議事録をきっちり取るのではなく、いろんなアイデアを言い合えるような形のものを1回開いてはどうかということです。確かに協議する事項がまた出てくれば、2回とも今までと同じような協議会にするということもできます。一方、開催頻度は2回程度って書いてあるので1回でもいいのかという話もあります。ただ、少しざっくばらんにプレストをするようなことも含めて機会が無いものですから、そういう機会を持ちたいなと思います。また、結構JICAの人は飲みに行くのが好きな人が多かったので、懇親会の機会も中部はないので、何かそういう機会もあっていいのかなと思います。少し砕けた形のもう一回があってもいいのかなと思います。その時は、本音で話すと言うと変ですけども、少しざっくばらんに話せればと思っております。いかがでしょうか。

中島：NGOがもしなければ、ご意見ございましたら、ぜひ、JICAさんの方でお願いします。

佐藤：小原さんがいらっしゃった時はコーディネーター会議でもざっくばらんにお話をさ

せていただいたなというのを今、思い出します。1回ではどうですかというのも、協議事項で何を協議して、そして決めていくのかというところが、なかなかアイデアが見つからなく話していることも硬いイメージがあり、どのように打ち破っていくかとか、何のために集まるのかというところまで、コーディネーター会議の中で話し合うことができなかつたというのが、反省点と思っています。なので、回数ではなくてやはり中身の問題なのかなというふうに思います。この議事録を作るに当たってもやはり苦肉の策で作っているところもあります。コーディネーター6人で継続するに当たって限界も見えてきたこともあったので、1回というご提案をさせていただきました。

山田：私も参加させていただいたのは、たぶん2回目なので、『協働ハンドブック』の全部漢字を読めないから一生懸命翻訳して、一生懸命読んで楽しみにしていました。しかし、会議に出ますと、語り過ぎじゃないかなと思います。どこまでが話ししていいか、もっと気楽に話せる場でやった方がどうかと思います。あとは現地でしている活動だけではなくて、私の団体が国内で活動していますが、それを含めて JICA、と他の団体が取り組みをしたらどうかと感じています。

龍田：今のは、皆さんの活動紹介のような部分もあっていいということでしょうか。JICAさんの紹介とかでしょうか。

山田：紹介ではなくて、やはり意見交換が一番楽しみにしています。意見交換をこっち側で聞いて、向こうで答えていただいて、攻撃ではなくて、気楽に質問したり向こうで答えてもらったりというのがいいと思います。もちろん報告も大事ですが、やはり意見交換のためなので、ぜひまた今度やる時にそっちもやっていただければと思います。

中島：ありがとうございます。

龍田：最近、話題が少ないと言っているのは、少し前ですと、草の根の新支援型ができてくる前というのはかなり活発に話し合われ、この結果は新支援型への改定にかなりインプットしました。その過程では、多数の地域の NGO からアンケートを取って、ここの会議の場でいろいろ、あるいはこの会議の前に意見交換会を持ったりしました。それで地域の中小の NGO が取りやすいようなスキームに変えていくための意見提案を本部も含めて行ったという経緯があります。それは一段落したので、すぐに、小さな NGO 向けのスキームということにならず、話題が出てこないということかと思います。ただ今おっしゃったように、お互いの状況をなかなか聞けないとか、自分たちの事業も見せつつ意見交換をすとか、あるいは JICA さんの方の今の取り組みを紹介するとかも必要と思います。例えば、前回ですと、AJU さんの取り組みをご紹介いただいて、それについて話し合うという形もできました。もう少しそういう意味で話し合いができるということと、もう少しざっくばらんに話せる雰囲気をとということでしたので、そういうものも含めて少しブラッシュアップして、変えられるところは変えつつやっていくというのはどうでしょうか。

中島：NGO 側からの提案としては、2回だけれども、中身を改善して、例えば1回はざっくばらんな記録を取らない、意見交換がしっかりできるような会にしたいという提案だった

と思います。ここで結論を出した方がよろしいでしょうか。どうぞ、お願いします。

高坂：JICA 中部の高坂でございます。この NGO、JICA 中部地域協議会の回数ということで、1年間で2回というのは多いのではないかとということも思っている方もいらっしゃるのではないかと、われわれが問題提起させていただきまして。今までのお話を伺っていると、もっと皆さんの興味をそそるような議題設定ですとか、話し合いの仕方というところで工夫してやっていくべきではないかとということです。2回という回数は維持していくべきではないかとということです。私もどうしても1回にすべきところを全然議題がないということではないと思いますので、2回ということでは議題とか進め方について工夫していくということではよろしいのではないかとというふうに思います。

岩瀬：研修業務課の岩瀬です。私としても、先ほど龍田さんが言われたとおり、1回はこういった形でフォーマルな形でお話をさせていただく場があった方がいいのかなとは思いますが。もう一回に対しては、最初から下のカフェクロとかで一緒にグループに分かれながら、このグループはちょっとこんな話をしてみましようかというような形で緩く話をしていくのもいいのかなというふうには思っています。

先ほど、龍田さんの第3回の NGO-JICA 協議会の中で、本体業務の中での NGO と JICA のコラボという話も東京の方では話題になったというふうに伺っています。私自身も研修事業の中で、先ほど冒頭、お話ししたとおり、NGO の皆さんにお世話になっているような研修というのも増えてきています。どういった形でコラボしていけるのかということは常に模索していますので、そういった中で皆さんからこんなことができるよとか、こんなところを私は悩んでいるんだということをざっくばらんにお話しさせていただきながら、良い組み合わせを考えていけるとありがたいかなというふうに思っています。

後は、今回皆さん、各組織の代表の方がご参加いただいているんだと思うのですが、もし可能であれば、スタッフの皆さんとか含めて、ぜひ来ていただけると、本当に JICA が敷居が高いというふうに思われている方もおられるかもしれないのですが、そのことは全くありませんので、ぜひ来ていただきながら、本当に思っている事を、あるいは私のフィリピンでの、私、JICA 事務所はフィリピンでしたので、そういったことも含めていろいろとお話ができるとありがたいかなとは思っています。

中島：他にはございますでしょうか。

竹内：私は海外協力団体から足を洗っているのですが、本当は、今日は聞き役だけにしようかなと思ったのですが、あまりにもこの会議が面白くないので手をあげました。以前に数回参加したことはありました。こんな状態では、だんだん来たくなくなると思います。こういう説明、報告だけなら、インターネットで見ればいいということになります。例えば、テーマを決めてというのは大賛成です。先ほど自己紹介で言った、まちづくりスポット、日本の中間支援団体を立ち上げたのは2000年の時のインドの事業の視察に行った時に、向こうの村長さんから「あなたたちにぜひ教えてほしい事があります」と言われました。ミニ水力発電でその村で電気をつけました。とても感謝されたのですがその時に村長さんか

ら、「自分たちよりも子どもや孫は豊かになってほしいから町の学校に行かせる。しかし町の学校に行くと帰ってこなくなる。帰ってきてても仕事がない。どうしたら教えてくれ」と言われました。その時に、私は何も答えられなかったのです。「日本のこの村、この町に来てください。ちゃんと持続可能な暮らしをしている見本があります」と言いたかったのですが、どこを見渡してもなかったのです。帰国後日本のコミュニティに目を向けるようになり、高山ですけれども地域づくりに取り組むようになりました。そうやって2017年ぐらいになった頃に、「見てください」と言えるような地域が各地に出てきました。4,000人ぐらいの小さな村ですけれども、頑張っている所があります。その地域が活性化していると、村から出ていくのではなくて、町から人が来るというような状況にもなっている所がいくつか出てきています。なので、例えば、日本の地域づくりに学ぶ、例えばそういうようなテーマで、それを詳しく説明してもらって、そこの事例から海外でも使えることがあるのではないかなというように、勉強会的なことをすれば、少し若いスタッフにも参加を促して面白くなるのではないのでしょうか。それを元に意見交換ができ、興味が出てくるのではないかなと思います。2000年頃には日本の地域から学ぶなんていうことはとても言えない状況だったのですが、今、いくつかそういう持続可能な活動が出てきて、しかも年寄りばかりのような村に若い18~35歳までの人を、自治体から推薦してもらって地域のマネジメントができるようなことを考えているような町、村もあります。ですから、そういう日本の具体的な活動を聞いて参考にするというような会もあってもいいのかなというふうには思います。ちなみに私がその中間支援団体でいろいろやっているのですが、全部ソムニードでやったインドの村での人への関わり方を基本としています。プロジェクトしつつ学び、実践し振り返りというようなことを国内の事業でも使っています。海外でやったことが本当に日本でも、その方法論は役に立っています。しかしそればかりでは悔しいではないですか。日本の良いところを向こうにという、そういう意味で、まだまだ少ないのですが、日本の地域に学ぶという、数少ない事例を引っ張り出して、意見交換をすればもう少し、何ていうのでしょうか、海外旅行ぐらいにしか関心がない人にも、JICAの活動に少し目を向けてくれるきっかけになるのではないかなと思います。現在はあまりにも分断されています。海外にだけ目を向ける人たちと、それから日本の国内にという、そこに全然共通項を見出してないからではないかと、私は思っています。そこが一緒のところがあるよ、学び合うことがあるんだよというようなテーマで話せば、少しは国際協力にもう少し目を向ける人が出てくるのではないかなというふうに思っています。

中島：竹内さんから一つの例として地域の活性化、地方創生、そういうものから学ぶというか、海外の例を日本で生かした持続可能なまちづくりなどの好事例紹介、学び合いというのができればいいなということです。

今この時間自体も少し意見交換の活性化した意見交換ができたと思います。ぜひ年2回というこの会の中身を改善しつつ2回を持っていくという方向で進めていくということでしょうか。そういう方向でコーディネーターを頑張っていかななくてははいけません

んが、よろしく申し上げます。

それでは、『協働のハンドブック』の話は少し出たのですが、今日は準備不足ということでありまして、この後、コーディネーターの打合せを会が終わった後にしまして、今後の『協働ハンドブック』について意見交換をどうするかということについて、いつ実施するかということを含めて話し合います。今日は割愛しております。

では最後に、西井理事長から閉会あいさつをお願いいたします。

西井：もうすでに今、この協議会をどうするかということで、皆さんの意見をお伺いしてそれがまとめになっているような感じもします。まさに10回という会を重ねてきたこの中部地域協議会の在り方といいますか、まさに連携の在り方ですね。NGOとJICA中部との連携の在り方が今、話し合われたんだろうなというふうに思っております。竹内さんのお話にもありましたように、海外での経験が国内での課題の取り組みにも役立つんだという、この視点が出てきたのは新しいです。やはり2011年の東日本大震災を機に多くのNGOが、国際協力NGOが地域に入って行って支援に入って行って、そこで同じような現実、海外で出会う人たちと同じ構造の中にある現実を見たということだと思います。そういった意味でいくと、やはり地域にあるJICAの機関というのは、この地域の課題と密接にこれから向き合っていくのであろうし、向き合っていただきたいなというふうに思います。昨年SDGsも採択をされて、国内でも指針が閣議決定をされまして、これから順次実施に移されていくことだろうと思います。JICAの方でもポジションペーパーが作成されて、これから国内でも、地域でも順次実施計画が作られていくことだろうと思います。SDGsの特徴はやはり包括性、相互関連性や統合性ということにあり、またマルチステイクホルダーの連携ということもうたっております。それから地域での、特に自治体での活動とか、あるいは自治体の取り組みですとか、それから地縁共同体の活動なんかも重要だということをうたっております。実施指針にもそのように書いてありますので、ますます地域でのNGO、NPO、それから地域であるJICAの地域センターの取り組みというか、連携というのは非常に重要な意味を持ってくるのではないかというふうに思います。ですので、たぶんこの協議会自体もその意味では重要な意味がこれから出てくるのではないかと思います。またそういうふうに位置づけ直して、11回目からは考えることができればいいかなというふうに思います。今後も、引き続き連携について、よろしく願いいたします。これで私のあいさつとします。ありがとうございました。

中島：時間を30分超過いたしましたけれども、これで第10回の中部地域協議会を終わりたいと思います。ご協力ありがとうございました。

多田：ありがとうございました。

以上